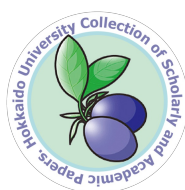




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ヘリテージと歴史コミュニケーション
Author(s)	岡田, 真弓
Citation	科学技術コミュニケーション, 35, 77-82
Issue Date	2024-09
DOI	https://doi.org/10.14943/111795
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93240
Type	departmental bulletin paper
File Information	jjsc35_09_okada.pdf



ヘリテージと歴史コミュニケーション

岡田 真弓¹

Heritage and Historical Communication

OKADA Mayumi¹

キーワード：パブリック考古学，ヘリテージ・スタディーズ

Keywords: Public archaeology, Heritage Studies

1. はじめに



図1 講演の様子

皆さん、こんにちは。私の話は前のお二人とはややトーンが違いかもしれませんが、皆さんの今後に役立てていただければ幸いです。

本日は、「ヘリテージと歴史コミュニケーション」というタイトルを用意してみました。

まず、私の自己紹介をしようと思います。私はパブリック考古学と、ヘリテージ・スタディーズ（文化遺産研究）を二本柱にしてこれまで研究してきました。考古学は、基本的には発掘調査によって得られた遺物や遺構といった物質

文化から、過去の人々がどんな生活をしていたのかということを再構築する学問分野です。パブリック考古学は、そうした考古学の様々な活動が現代社会、あるいは歴史のある時点でどのように考えられていた（受容されていた）のか、あるいは利活用されていたのかということを考察したり、現代と考古学活動の中にある課題を実践を通して解決することを目指す、考古学の関連分野です。パブリック考古学の主要なアプローチには、「教育的」、「広報的」、「多義的」、「批判的」アプローチがあると言われています（松田・岡村 2012）。教育的アプローチは、たとえば博物館や遺跡において考古学に関連する知識を説明することで、市民が考古学研究に必要な素養を身につけ、専門家と同じように過去を理解できるようにすることを目指します。広報的アプローチは、新聞、メディア、

2024年 8 月27日受納 2024年 8 月29日受理

所 属：1. 北海道大学アイヌ共生推進本部／国際広報メディア・観光学院

連絡先：m-okada@cats.hokudai.ac.jp

イベント等を通じて考古学の魅力をアピールすることで、社会が抱く考古学のイメージを改善し、サポーターになってもらうことを目指しています。

ヘリテージ・スタディーズでは考古学的なものだけではなく、有形、無形、それから自然、文化といった様々な形態のヘリテージと人々の相互交流というものを考察しています。こうしてみると研究の柱であるパブリック考古学においても、あるいはヘリテージ・スタディーズにとってもコミュニケーション（交流）は大事なポイントです。

2. パブリック考古学に興味を持ったきっかけ

はじめに、なぜ私がこうしたパブリック考古学、あるいはヘリテージと人々のコミュニケーションに関心を持ったかという物語から始めます。私は大学で考古学を学ぶゼミに入りました。私の指導教官は、主にイスラエルやパレスチナ、ヨルダンといった聖書の舞台となった地域の考古学を専門とする先生でした。私がパブリック考古学への関心を強めていったのは、イスラエル北部ガリラヤ湖の東岸に位置するエン・ゲヴ遺跡の発掘調査に参加したことがきっかけでした。当該遺跡は、1938年に設立されたキブツ（農業共同体）の中に位置しており、過去の調査から鉄器時代からローマ時代までの遺構が確認されています。イスラエルではユダヤ民族の歴史と建国神話が結びつきを持っていたこともあり、考古学に対する関心が高い人たちが少なくなく、キブツ住民の中にもエン・ゲヴ遺跡の調査からどんなことが分かるのか期待を寄せている人もいました。私がパブリック考古学に関心があったこともあり、2009年から2011年の発掘期間中、調査成果の発信を目的として住民説明会を行いました（岡田 2016）。発掘調査の最終年である2011年は過去3年間の研究調査から明らかとなった内容について、本調査団の団長であり私の指導教官でもあった杉本智俊教授が住民に説明しました。その後、住民から様々な質問が出ましたが、とくに発掘された遺物・遺構（＝物質文化）が明らかにした当該遺跡の歴史的・文化的背景に関する質問が多く寄せられました。従前から当該遺跡は、旧約聖書に言及されるアラム人の町アフエクの有力な候補地と指摘されており、説明会に参加した住民の中にも聖書とのつながりを持つ場所としての認識が共有されているようでした。一方、3年間の発掘調査の成果として示された情報には、従来キブツ住民が抱いてきた遺跡の歴史像とは必ずしも一致しない遺跡における他民族の影響についても言及があり、その点についてやり取りが続きました。この時、考古学者が構築する歴史以外のなにか、非考古学者から遺跡に投影される眼差しがあるということ、そして、このまなざしの強さというものに衝撃を受けるわけです。

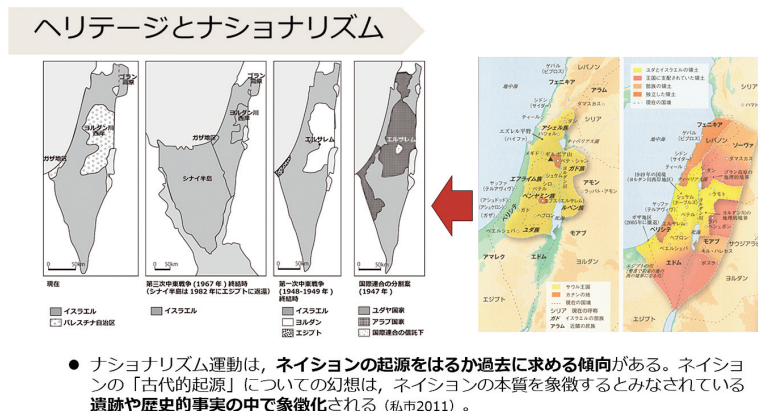


図2 ヘリテージとナショナリズム

この経験がきっかけで、その後の私はイスラエルの考古遺跡や、ヘリテージに投影される現代の人々の眼差しに関心をもって研究していきます。イスラエルはその建国の成り立ちを見ても、建国神話が考古遺跡と容易に結びつきやすいことがわかります。スライド（図2）の右側が旧約聖書で言及される古代イスラエ

ル王国の範囲を示した地図です。古代イスラエル王国はダビデ王とその息子ソロモン王によって統治されたとされていますが、最終的に紀元 70 年にローマ帝国によって滅ぼされ、当該地域に暮らしていたユダヤ人は各地に離散（ディアスポラ）します。ところが 19 世紀になり、とくにヨーロッパ各地で反ユダヤ主義が激化するなか、ユダヤ民族も自分たちの国民国家を作ろう、旧約聖書に言及される「約束の地」に戻ろうというシオニズム運動が起きます。ヨーロッパを中心に各地からユダヤ人が現在のイスラエル・パレスチナ地域に入植し、1948 年、現在のイスラエル国を建国するわけです。ところが、当該地域にはずっとアラブ系住民も暮らしてきたわけですので、建国直後から領域をめぐる争いが周辺国も巻き込んで続くことになります。

こうしたことは、イスラエル・パレスチナでは非常に顕著ですが、他の国でもあり得ることです。ナショナリズム運動は、ネーションの起源、国家の起源を遙か過去に求める傾向があると言われていて、このネーションの古代的起源はその本質を象徴するような、例えば、遺跡とかモニュメントに投影されるということが指摘されています（私市 2011）。

3. ユダヤ民族史に関係する遺跡の保存

事例として、イスラエルの遺跡を少しご紹介します。たとえば多くの観光客が訪れ、世界遺産にも登録されている死海のほとりにあるマサダ国立公園では、ローマ時代に当地を統治したヘロデ王の壮麗な離宮を中心とする遺構が保存され、一般公開されています。また、マサダはローマ帝国に対して決起したユダヤ人が最後に籠城した場所でもあり、結果的に民族の誇りをまもるために集団自害が起きたとされる場所でもあります。このローマ帝国に対するユダヤ民族の最後の抵抗については、ローマ国籍を持つユダヤ人歴史家フラヴィウス・ヨセフスが残した歴史書「ユダヤ戦記」に記されています。ユダヤ民族史を物語るこの場所は多くの国内外のユダヤ人巡礼者の聖地であり、またイスラエル国防軍の研修地にもなっていたそうです。

こうしたユダヤ民族史に関係する遺跡の保存は、イスラエル「国外」、すなわちパレスチナ自治区内でも行われています。ヨルダン川西岸の北部に位置するシロ遺跡は、契約の箱を安置した幕屋があった場所として旧約聖書に登場します。現在は入植地シロのなかで保存されています。過去に数次にわたる発掘調査が行われ、この地域には聖書に言及される頃にできた都市の痕跡が確認されているものの、聖書が言及する宗教都市シロかどうかの確定はできていません（岡田 2020）。

4. ヘリテージとナショナリズムをめぐる現象

また、考古学的なヘリテージとナショナリズムをめぐる現象は、エルサレムでも顕著にみられます。エルサレムはユダヤ教、キリスト教、イスラーム教の三大一信教の揺籃（ようらん）の地と言われており、この三つの宗教の聖地が同じ場所に重なってある、または隣接しているということがままあります。例えば、エルサレムの旧市街には、かつてユダヤ教の神殿があって今はその西側の壁だけが残されている「神殿の丘」とイスラーム教の聖地「ハラム・シャリーフ（アラビア語で「聖域」の意味）」が同じ場所に重層的に重なって存在しています。

古代イスラエルにおいて統一王国の黄金期を築いたダビデ王は、エルサレムに王宮を構えたことが旧約聖書に記されており、長年、その場所の特定が考古学者たちの関心事でした。2005 年、E. マザールというイスラエル人考古学者が神殿の丘／ハラム・シャリーフの南側の丘陵で、「ダビデの王宮」とされる大型建造物を発見したと公表したことで、「ダビデの町」と呼ばれる地域が大きく注目されることになりました。現在、当該遺跡はイスラエルの国立公園の一部になっており、ダビデの

町財団という NPO 団体が管理しています。一方で、エルサレムのなかでも多くの観光客が訪れるこの遺跡が存在している場所は、パレスチナ自治区（東エルサレム）に所在しています。イスラエル側によって現在も継続される発掘行為が、隣接するパレスチナ人居住地にまで拡大しており、発掘という名を語ったエルサレムのユダヤ化だという批判も起きています。現地では、考古学を通じたエルサレムのユダヤ化に警鐘を鳴らすガイドツアーも行われています（岡田 2017）。

5. 誰から見た歴史か

歴史学とは過去の人が文字で書き残した記録、絵画、あるいは発掘された考古学資料等を用いて、当時の出来事や文化、社会を復元することを目指す学問です。しかし、歴史学の史資料には、かならずしも、実際におこった出来事、または実際に存在した文化・社会が「ありのまま」残されている／書かれているわけではなく、その叙述や描写は、「誰かの視点から見たもの」とであるという特徴を持っています。そのため、歴史家（＝史資料の読み手）が生きている時代の価値観を完全に拭い去って資料を見ることはできないという限界があります（カー 2022）。歴史学は、そうした限界性が認識された上で研究が進められてきた一方、一般的には国家の歴史が中心に語られてきました。ところが、ここにはいくつか課題があります。まず国家の歴史は、国家ができる以前の歴史も扱うわけですが、歴史的にみると共通した言語や文化習慣を持つ人々が暮らす地理空間が複数取り込まれて近代国家になるケースもありましたし、あるいはそうした地理空間が複数の近代国家にまたがってしまったケースもあるわけです。ヘリテージとナショナリズムの関係や近代国家と歴史の性質を踏まえると、近代国家の歴史はその国家における主流派の視点で形成されやすくなり、少数者の歴史が等閑視されることが起こるわけです。

6. アイヌの視点から見つめなおす歴史

イスラエルとパレスチナは顕著な例ですが、日本史にも類似した課題があります。北海道の歴史年表を見ますと、縄文文化期までは本州と同じですが、その後、北海道は続縄文、擦文、オホーツク、アイヌというように、本州の年表とは異なる時代名が続きます。ところが、従来、北海道の歴史も基本的には日本史、本州の歴史を基本的な枠組として語られてきました。もちろん、アイヌも口承で自分たちの歴史を語ってきたわけですが、日本史研究で史料としてほとんど扱われてきませんでした。したがって、北海道史は基本的にアイヌ以外の視点で書かれてきたと言われます。そうした北海道の歴史が抱える課題に挑んだのが、国立アイヌ民族博物館が 2023 年に行った企画展「考古学と歴史学からみるアイヌ史展：19 世紀までの軌跡」です。この展示では、アイヌの視点から約 3 万年前の旧石器から 19 世紀に至るまでの北海道、樺太、千島、東北北部のエリアの歴史を考古学と歴史学の史資料から復元することを目的としています。この企画展では、一般的に、アイヌ文化として広く認識されている文化が組み立てられ固定化されていった時期を 18 世紀から 19 世紀、アイヌ文化を特徴づける要素が出現し強まっていった時期を 13 世紀以降としつつ、旧石器時代から擦文・オホーツク文化期もアイヌの系譜の延長線上に位置づけています。和人から見た歴史があるのであれば、アイヌから見た歴史があるべきという問題意識を共有することができる展示でした。

7. アメリカの国立公園におけるインタープリテーション

こうした脱構築的な取組は他の国でも行われています。例えば、アメリカの語り部を自負する国

立公園を管轄する国立公園局（NPS）は、アメリカ全土で 425 の様々な施設を管理しています。ここでは自然、文化、歴史遺産などが保護され、それらの価値についての教育・普及活動が行われています。NPS では体験をつうじて、ヘリテージと来訪者との間に感情的・知的つながりを作り上げるコミュニケーション術である「インタープリテーション」が大変重視されています。これまでの国立公園でのコミュニケーション、とくに歴史に関する部分では、白人中心のストーリー展開が中心でした。たとえば、アメリカ初代大統領のジョージ・ワシントンについては多くの人が知っており、彼の功績ばかりが強調されます。しかし、彼が奴隷にしたアフリカ系アメリカ人やそうした人々の子孫についてはあまり知られていません。しかし、アメリカの語り部としての国立公園は、より多くの来訪者をつなげるためにいくつもの歴史の提示が必要であると判断しました。NPS の取組の一つ Telling All Americans' Stories プログラムは、ヘリテージについてさまざまな立場からの視点を提示することで、来訪者が国立公園とチャンネルを持ってもらうように腐心しています。現場では、アメリカの先住民族はもとより、アフリカ系、ラテンアメリカ系、アジア系アメリカ人、障がい者、LGBTQ、女性など様々な来訪者が様々な視点を持てるような情報提供をするとともに、こうした視点にそったインタープリテーション・プログラムが展開されています。

8. もう一つの歴史実践

これまでは歴史に対する多様な視点を共有するという話でしたが、歴史実践そのもののあり方も問うべきだという意見も出ています。オーストラリアの先住民族アボリジニのオーラル・ヒストリー（口承による歴史）を研究していた保莉実¹は、その著書『ラディカル・オーラル・ヒストリー：オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』の中で歴史学者以外が語る様々な歴史に耳を傾けることの大事さを提唱しています（保刈 2004）。アボリジニのジミー爺さんは、大地に西から東に線を引き、くりかえし正しい道を歩みなさいといひます。これはアボリジニの世界観をしめすドリミングが示す空間認識ですが、イギリス人ジェームス・クックは北から南へとやってきて彼らの東西線を切断し、法を犯したといひます。保刈は、白人入植者たちの歴史を語ったジミー爺さんの論点は、イギリスが東西線の上に位置していないという点であることを強調しつつ、歴史家以外の語りには、歴史家から見れば「間違った歴史」や「危険な歴史」も語られるかもしれない、しかし、これらを「神話」や「記憶」として、歴史から排除すべきでないと説きます。現在の歴史学は実証主義に根ざしているけれども、もう一つ「経験主義」としての歴史があって良いのではないか。実証主義的であることを目指した西洋出自の歴史実践と、先住民族アボリジニの歴史実践とのギャップを承認しつつ、両者の間でコミュニケーションをつづけることが、「歴史への真摯さ」が接続されていく可能性を放棄しない態度であると指摘しているわけです。

9. 「たったいくつものかたり」を歴史コミュニケーションする

最後、私なりに「たったいくつものかたり」を歴史コミュニケーションするとはどういうことかを考えてみました。この「たったいくつものかたり」というものは、例えば、これまで実証主義に根差した歴史学が提示してきたもの以外のものというふうに言うことができます。ただし、この「たったいくつものかたり」を歴史として捉えようとするすれば、テッサ・モーリス＝スズキ（2014）が言うように、人々が過去の意味を創造するプロセスの真摯さが一つポイントになると思います。さらに、「たったいくつものかたり」の歴史コミュニケーションは何であるかについては、これまでの話を踏まえれば、矜持と責任を持って語られる多様な歴史像が出会う機会（二宮 2011）を作ると

ということではないかと思います。それはすなわち、他者理解と対話のツールであって、例えば、一方の人がいわゆる王道の歴史学以外のものを提示したとしても、それに真摯に向き合って、それとコミュニケーションを続けることが、「ラディカルに『共』の可能性を考え直す（千葉 2022）」ことなのかなと解釈しました。

大変時間が延びましたが、私からの話題提供、ここで終わります。ありがとうございました。

発表でご紹介した内容に関連する主な文献等

千葉雅也 2022: 『現代思想入門』講談社現代新書。

第7回特別展示「考古学と歴史学からみるアイヌ史展: 19世紀までの軌跡」(国立アイヌ民族博物館),

<https://nam.go.jp/exhibition/floor2/special/rekishi2023/>, (2024年3月6日閲覧)。

保刈実 2004: 『ラディカル・オーラル・ヒストリー: オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』御茶の水書房。

カー, E. H. (近藤和彦 訳) 2022: 『歴史とは何か 新版』岩波書店。

私市正年 2011: 「現代ナショナリズム復興における「過去の歴史と文化遺産」の意味」『ナショナリズム復興のなかの文化遺産: アジア・アフリカのアイデンティティ再構築の比較』日本私立学校振興・共済事業団学術研究振興資金報告書(2009・2010年度)。

松田陽・岡村勝行 2012: 『入門パブリック・アーケオロジー』同成社。

モーリス＝スズキ, テッサ (田代泰子 訳) 2014: 『歴史は死なない: メディア・記憶・歴史』岩波現代文庫。

二宮宏之 2011: 『二宮宏之著書作集1 全体を見る眼と歴史学』岩波書店。

岡田真弓 2016: 「キブツ・エン・ゲヴにおけるパブリック考古学の研究」杉本智俊・間舎裕生(編著)『エン・ゲヴ遺跡 2009年-2011年 調査報告(慶應義塾大学西アジア考古学調査報告1)』, 385-393。

岡田真弓 2017: 『イスラエルの文化遺産: 遺跡の保護と活用』慶應義塾大学出版会。

岡田真弓 2020: 「「私たちの」文化遺産をめぐる衝突: ヨルダン川西岸におけるイスラエルの戦略とパレスチナの抵抗」『金沢大学文化資源学研究』24, 1-12。

Telling All Americans' Stories (US National Park Service), <https://www.nps.gov/subjects/tellingallamericanstories/index.htm>, (2024年3月6日閲覧)。

東京大学教養学部歴史学部会(編) 2020: 『東大連続講義 歴史学の思考法』岩波書店。